

休日や祝日、ひっそりした仕事場で原稿書きなどにいそしんでいると、かならずのように電話がある。休みなのにと受話器を取ると、ほとんどが金融か投資の勧誘である。「ご主人はいますか」と聞かれ、即座に「出かけています」と返し、さらには「わたしはスタッフでおカネのことはわかりません」と付け加えるときもある。神経痛に苦しんだ時期、ようやく受話器を取ると、儲け話で、「からだが痛いので切る」と告げると、「俺がそこに行つて揉んでやろうか、オラア」とすぐまれた。最近では、「太陽光発電のパネルに投資しないか」というの

を聞いた。どこに設置するかわからない電池パネルに、

資金を出す人間がいるのだろうか。

風力発電など自然

エネルギーからんだ儲け話が日本全国を駆けめぐっているのだろう。つくづく思うのは、そんなにうまく話ならば、ひとに勧めていないで自分で投資すればよいのではないか。ひとが気づいていないチャンスだからこそ稼げるはずなのに、見ず知らずの他人に教えてどうするのだろうか。(ひとに勧める) 事態が、まわりまわって、話の虚偽を暴いている。

まわりまわって気づかないうちに自身が批判されているのは、書名にもある。「こうすれば儲かる」内容の本を出している出版社は

連載「ツセイ」第41回

まわりまわって

裕福か。「社長が不在でも成長する会社」といった書籍を刊行している版元に、はたして社長は不在だろうか。「断捨離」を学ばせる本を制作中の編集者の机がモノで溢れている、そんな図はよくある。新聞が学歴偏重を批判する記事を載せる日もあるが、その新聞社がそもそも学歴を偏重している……。現在のところはさいわいそうはなっていないが、原子力発電批判をワープロを使って書いてよいのか、との問題もあった。電力のなかには、原子力によって発電されたぶんが含まれている。アメリカを批判する友人は、ジーンズを穿か

なかった。

他者に呼びかけないで自分でやるべきではないか、との思考テストは、日々のなかで有効だ。支援と称して怪しげなカンパを募る人間を見て、「街頭に立ちつづけて他人に頼むくらいなら、自分で労働して稼ぎ、その報酬から寄付すればよいのではないか」と思うひともいるだろう。カンパを、集金目的と見なすか、幅広い人間の賛同を得ることで運動となつていくと考えるか、この線引きはむずかしい。

鈴木一誌

「まわりまわって自分に返ってくる」との思考が、たとえばベ平連の、おもには小田実によって訴えられた「加担の論理」に実を結んだ。強国アメリカに対して小国の日本は被害者だが、戦争特需で利益を得ている点ではベトナムに対しては加害者になっている。被害者と加害者は折り畳まれているのだ。小田の文章を引く。

「被害者」が「被害者」であるにもかかわらず、いや、まさにそれゆえにこそ「加害者」になるという認識は、しんどい認識だった。それは、ことばをかえて言えば、「難死」

の当事者がそのまま、まさに「難死」の当事者であるゆえに「加害者」となることだったからだ。「ベ平連」の運動は私流儀の言い方で言えば、「難死」にかかわって、「難死」をもうこれ以上ひき起こすなという運動として始まった。それは「殺すな」の一語に集約できる。しかし、今、「殺すな」は「難死」の当事者、「被害者」自身にもむかつて来ていた。(「ベ平連」・回顧録でない回顧)

安ければよいのか。消費者はときに加害者になりうる。そんな考えが「フェアトレード」運動を回転させる。消費という「まわりまわって」動きをやめない回路のなかに重なりあう複数の層を読みとりたい。

(すずき・ひとし/ブック・デザイナー、題字デザインも筆者)